

インターネット時代における性的マイノリティ の「名乗り」と「名付け」

——インターセクショナルリティと「ロマンティック」
の観点から——

“Call Themselves” and “Name Themselves” of SOGI Minorities
in the Internet Age: From the Viewpoint of
Intersectionality and “Romantic”

荒木 生

キーワード：性的マイノリティ，ジェンダー，セクシュアリティ，ロマンティック，インターセクショナルリティ

Since 2000, identities and names referring to Sexual Orientation and Gender Identity (SOGI) minorities have been segmentalized and pluralized. People with identities that have been recognized as if they did not exist or as if they have been assimilated into those other than SOGI minorities or a large framework of LGBT began to express their readiness to “name themselves” and “call themselves” on the Internet. In research on SOGI minorities, the author conducted fieldwork and encountered people who named themselves other than the relatively well-known identity of LGBT. Names referring to sexual orientation and gender identity are actively increasing primarily in the internet community. This article aims to, as timely as possible, document this phenomenon. The article introduces what SOGI minorities name and call themselves in this new era

and discusses the significance and meaning from the perspective of intersectionality and romantic-orientation based on the history of gender and sexuality studies.

目次

はじめに

I ジェンダーとセクシュアリティの研究史

- 1 主要な理論の紹介
- 2 インターセクショナルリティ（交差性）

II 調査の概要

III 新たな「名乗り」—当事者の語り—

- 1 A氏の事例
- 2 B氏の事例
- 3 C氏の事例
- 4 D氏の事例
- 5 E氏の事例

IV 考察

- 1 「名乗り」と「名付け」の作用
- 2 「ロマンティック」という概念の導入

おわりに

はじめに

2000年代以降、性的マイノリティのアイデンティティとその名称の細分化または複数化が顕著になっている。これまで存在を透明化されていたあるいは同化されていたアイデンティティを持つ者が自ら「名乗り」と「名付け」を行う姿が目立つようになってきている。本稿は、こうした現状を明らかにするとともに、その社会的・文化的意味を検討するものである。

筆者は、これまで「同性愛」や「同性間の親密な関係」が歴史的にどのように変化してきたのか、またその変化がどのように言説化されてきたのかを、特にインターセクショナリティ（交差性）という考え方の観点から検討している [荒木 2018]。現在「LGBT」（レズビアン・ゲイ・バイセクシュアル・トランスジェンダー）という言葉は日本のメディアでも普及しているが、研究にあたるフィールドワークの中で筆者はLGBTという既存の呼び方以外で自らのアイデンティティを名乗る人々、またはそれらを更に詳しくカテゴリ分けしたアイデンティティを名乗る人々に出会った。セクシュアル・オリエンテーションやジェンダー・アイデンティティの「名乗り」の増加は、主にインターネット上のコミュニティを基盤に、現在も盛んに行われている。この事象とその名称を出来るだけタイムリーに記録に残さねばならないと考え、本稿を書くに至った。

以下、第Ⅰ章では、性的マイノリティ研究の動向を確認し、本稿で使用する基礎的な語句、インターセクショナリティという概念について紹介する。第Ⅱ章では調査の概要を説明し、続く第Ⅲ章で当事者の「名乗り」と「名付け」の事例を何例か挙げる。第Ⅳ章では、以上の性的マイノリティの「名乗り」と「名付け」について、その意義と意味について、ジェンダー・セクシュアリティ研究の面から予備的に分析する。

I ジェンダーとセクシュアリティの研究史

1 主要な理論の紹介

もともと文法用語であった「ジェンダー (gender)」という言葉¹⁾を、人間の「性」を表す言葉として使用し始めたのは20世紀、シモーン・ド・ボーヴォワール (1908-1986) が女性解放思想の草分けとされる『第二の性』を記した頃である。それまでに性別を表す言葉であった「セックス (sex)」では表現できない、セックスとは異なる「作られた性別」の発見によって誕生したのが「ジェンダー」という性をめぐる概念であった。セックスが生物学的な性別を表すのに対し、ジェンダーは文化的あるいは社会的な性別を表す、

という認識が1980年代頃まで主流であった。しかし、90年代に入り、ポスト構造主義を背景にしてジェンダー論は進展し、セックスも（医療や科学によってその都度落とすところを見つけながら）社会的・文化的に構成されてきた概念であると認識が改められつつある。こうしてジェンダー概念の認識議論が深く考察されてきた背景には、近代社会がどのような論理と思想を土台にして構築されてきたのか解明するにあたってジェンダー概念と「セクシュアリティ」という概念の研究が互いに影響し合い、発展をかさねてきたことがある。

近代社会では、洋の西東に問わず男女二元論と異性愛主義を土台に構築されてきた。国家には国民の質と繁殖を管理することが求められ、そのため男女をめぐるジェンダー概念と、性行為に関するセクシュアリティ概念は国家の関心事となり、規範となる枠組みが作り出されたとされる。人間は誕生したとき、身体的特徴により「女 female」と「男 male」に振り分けられ、生活の過程で「女らしく」「男らしく」といった性役割（ジェンダー・ロール）と接触し続けることでそれを内面化、再生産しながら成長する。そして男女が結婚し、子供を産むことが求められた。つまり、男女間の子供をもうける生殖のためだけの性行為のみが正しいとされ、正しいセクシュアリティ（性的指向）が定められ、社会の求める「性」のあり方を「自然」とみなすようになった。そういった意味で、女性の身体と生殖に関する権利や、規範とは異なるジェンダーやセクシュアリティを抱えて生きる性的マイノリティの権利は、国家・公権力との争いにもなったのである [加藤 2017: 26-31, 46-60]。

まず、確固たる「生物学的」なセックスというものではなく、セックスも社会的・文化的に作られていることを歴史からたどっていく。セックスという概念が発明され、組み立てられていった18世紀から20世紀、「科学」が対象としたのは男性の身体であり、女性は生殖器・乳房・骨盤・臀部など「性」に関わる部分しか注視されなかった。女性は男性よりも動物に近い劣った生物とされ、劣った性質（骨格が小さい・衝動的・感情的・模倣的）とされるものは女性の身体的特徴、女性器と結びつけられた。また、女性と黒人はそ

の劣等性が類似しているとされ、文明と理性を体現する白人男性と、野蛮で動物的官能に支配された有色人種女性、という考え方が「異人種交配」の言い訳に用いられた〔柏木 2011: 195, 215-226〕。性科学 (sexology) は、成立してから長い間、人種主義的・異性愛主義的・男性主義的な偏見と差別を支えるために機能してきた学問でもあったのである²⁾。また、同性愛・異性装は禁忌であり性的逸脱の精神病とし、精神病と犯罪との関係をほのめかした上で同性愛者を犯罪者予備軍かの如く扱うドイツの司法精神科医クラフト＝エービング (1840-1902) による『性的精神病質』(1886) が発売されると、異性愛主義的かつ白人男性中心主義的な思想が当時の多分に偏見を含んだ「科学」に裏打ちされ、当時の価値観にそぐわない人々が「異常」や「劣等」とみなされるようになる。エービングの説に基づき「男性らしさを能動、女性らしさを受動」とし、男性が「性の主体」とされた〔古川 1993: 220〕19世紀当時では、性欲は男性のみが持つものであり、性欲がある女性は異常とみなされ、卵巣や子宮への強制的な手術などの医療行為やホルモン治療が行われた。これらの歴史事実により、医療や化学に裏打ちされたセックスというものも、その時代の価値観や思想を反映した人為的なものであり、セックスもまた社会的・文化的に作られたものであると言えるだろう。2020年現在では、男女のどちらとも判別しがたい性分化疾患³⁾として生まれる人の存在が認識されており、医学的・化学的にもセックスはグラデーションで、様々な身体のあり様が存在していることが判明している。本稿では、そうした必ずしも男女に分かれていない身体を、その社会の身体観に沿って分類する概念が「セックス」であり、それに基づいて構成された言語カテゴリや人間を男女に振り分けようとする力を「ジェンダー」と呼ぶ。

自分が自分をどういった性別 (ジェンダー) であると思うかを、ジェンダー・アイデンティティ (性同一性、性自認) という。日本語訳としては「性同一性」という語が適切という解釈もある。例えば、身体をもとに付与された「女性」というラベルに対して本人も別に強い違和感を覚えたことがないならば、いくら「男っぽい」とされる要素を持っていてもジェンダー・アイデンティティは「女性」である。また、「自分は男性だが」と自分について

語ることに違和感がなければ、その人は「男性」というジェンダー・アイデンティティを持っていることになる [砂川 2018]。こうした「性別を特に意識したことがない」人は、基本的には、出生時に割り当てられた性別に一致感を持っているということであり、こうした人をシスジェンダーという。対して、出生時に割り当てられた性別に違和感（性別違和 Gender Dysphoria, GD）を持っている人をトランスジェンダーという。トランスジェンダーには、出生時に割り当てられた性別とは他方の性別に強く持続的な同一感を持つ人もいれば、自認がゆれる人も、どちらでもない、どちらでもあるという人もおり、ジェンダー・アイデンティティも様々なあり方が存在している。また、他人が自分の性別を何だと思っているかを性他認、性別を理由に持たされる役割とその役割への期待を性役割（ジェンダー・ロール）といい、こうした「性」に関する社会における枠組みを性規範（ジェンダー・ノーム）という。

ジェンダー・アイデンティティは一度獲得されてしまったあとは変えようがないという考えや、幼いうちならば「矯正」や「変更」が可能だとする考え、つまり、育て方でジェンダー・アイデンティティは変えられるという学説が性科学者のジョン・マネー（1921-2006）によって提唱されたが、その検証方法は非人道的⁴⁾であり、偽りのデータに基づいていた。後にジュディス・バトラー（1956-）は「ジェンダーだけが構築されるのではなく、セックスも構築されるのだから、セックスもジェンダーである」と主張し、マネーのジェンダー論を批判している。人間を男女に振り分ける言語カテゴリと力をジェンダーと言うのなら、セックスもそうした言語のカテゴリによって男女と認識されるため、セックスもまたジェンダーなのである、ということである。生活を通して我々は常に男女とは何かを、自分や他人が男女どちらであるかを再確認している。この生活における確認・再生産の中で、ジェンダー・アイデンティティを一定して再確認する人もいれば、ある時点や要因でジェンダー・アイデンティティが揺れ動く人もいるということである。

続いて本稿では、「性」に関する身体機能とイメージ、性的な行為、性的な欲望の総体を、「セクシュアリティ」と呼ぶ。セクシュアリティを定義するこ

とは極めて難しいが、ここでは暫定的にそう定義しておく。セクシュアリティという概念はミシェル・フーコー（1926-1985）が作り出したと言われている。近代社会において、その人がどのような性的な欲望を抱くかは、その人の人格まで推測し、どのような存在であるかを決定づける要因とされており、男女間の性愛という規範的なセクシュアリティ以外を持つ人、つまり同性に性的欲求を抱く人や、生殖と関係ない性的な行為を好む人は「性的倒錯者」とされた。この流れで、恋愛感情や性的欲求の対象の性別を指すものとして、セクシュアル・オリエンテーション（性的指向）⁵⁾ という用語が誕生した。近代社会において性的欲求と友情は排他的とまでは言わないものの、異なる位相の情緒的経験として把握されがちだが、明確に分節されるとは限らないことが歴史的研究や比較文化的研究などから明らかにされている。近年のセクシュアリティ研究においては、一般に「同性愛」としてなされる同性間の親密な関係についても、通時的・共時的に同様の現象を表象しているわけではないと考えられている。

また、同性愛については様々な書物が刊行され、同性愛がどのような歴史の変遷を経て、同性愛に対する社会の認識がどのように変容してきたのかを問う研究が多く発表されている。古川誠 [1993] の研究では、近代日本形成期に同性間の肉体関係を含む恋愛が「同性性欲」また「変態性欲」という病理とみなされ、大正期には正常とされる異性愛との区別のために「同性愛」が認識され「同性愛者」という性的主体が誕生したということが論じられている。この研究を一つの先駆けとして、2000年以降、風間孝 [2010]、河口和也 [2003, 2010] 前川直哉 [2017] らによって、明治あたりから現在までの大まかな同性愛の歴史の変遷と社会の認識の変容が明らかにされている。しかし、同性愛に関する歴史研究の中で、「女性同性愛」の研究が男性のそれに比べて遅れをとっており、同性愛の歴史の中で「女性同性愛」は不可視化されていることを筆者は指摘しておきたい。

そして、1990年代にクィア理論が成立する。「クィア」(Queer) とは、性には様々なバリエーションとグラデーションがあるという考え方に基づいた用語である。1990年代初頭まで、「奇妙な」という意味から転じて「男性同

性愛者」「変態」「おかま」などの意味で使用された侮蔑語、差別語であったが、性的マイノリティが誇りある自称語として取り戻した。テレサ・デ・ラウレティス（1938-）、ジュディス・バトラー（1956-）、イブ・コゾフスキー・セジウィック（1950-2009）らの新たな模索により、アカデミズムの場で反異性愛規範の連帯として肯定的に使用されるようになり、性的指向のみには回収できない多様なセクシュアリティを意味するようになった。1991年に『ディファレンシズ』誌で「クィア理論」特集が組まれた際には、クィアという言葉にはゲイとレズビアンとの格差の解消と同性愛以外のセクシュアリティを総括する目的であったが、一つにまとめることによって本来のそれぞれのセクシュアリティの個別性を無化してしまうのではないかと危惧されるようになる[渡辺 1997: 275-276]。また、「クィア」そのものは「～ではない」という否定形でしか語れない「本質なきアイデンティティ」ではないかという議論も行われている。こうしてクィアという（性的マジョリティをも包括する）広い連帯の理論が提唱された。このクィアという語はセクシャル・マイノリティを指す呼称としても使用されており、同性愛者解放運動の中で生まれた「LGBT」⁶ や、それに Q（クエスチョニング）・I（インターセックス）・A（アセクシュアル、アライ）を足した「LGBTQIA」、複数形の意味を込めた「LGBTs」や「LGBT+」なども同じ用法で使用されている。

こうしてジェンダー・セクシュアリティ研究は、より包括的な理論を展開してきた。近年こうしたアイデンティティに関する議論では、「インターセクショナルリティ」への言及が増えている。

2 インターセクショナルリティ（交差性）

「インターセクショナルリティ」とは、個人の社会的あるいは政治的なアイデンティティと、それらが組み合わさることで起きる差別や特権、社会問題を理解するための理論的枠組みである。インターセクショナルリティという言葉は、2010年代から始まる第4波フェミニズムで盛んに使用されるようになった[実川 2020]。ジェンダーの問題にもっとも精力を注ぐフェミニズムでは、現在、第4波フェミニズムと呼ばれる新たな波が起こっている。この第4波

フェミニズムは「女性」を越えた連帯という理念があり、それは「インターセクショナル・フェミニズム」と呼ばれ始めている。

インターセクショナル・フェミニズムとは、生物学的「女性」だけの連帯ではない。これは人種や階級、国籍、宗教、障害、セクシュアリティ、市民権の有無、容貌、そしてトランスまたは性別違和の感覚やアイデンティティを持っているかどうかを含めて、軽んじられるマイノリティ（そして時には特権化されるマジョリティまでも）が連帯し、それぞれの分野を越えて、性差別を含む全ての差別と搾取を生み出す社会の構造を変革しようとする動きである [Stryker 2017: 4-5]。こうした、インターセクショナル・フェミニズムを理念とする第4波フェミニズムの動きは欧米だけにとどまらず、世界各地でこうした動きが連動している。日本も例外ではなく、日本においてもこの第4波フェミニズムと呼べる活動が起きていることが確認できている [荒木 2018]。

また、インターセクショナル・フェミニズムの影響は、学問の分野においてもみられる。

筆者は、近年のジェンダー・セクシュアリティ研究においてもインターセクショナル・フェミニズムの影響があると考えている。性的欲求を持たない、または必要としない人を指す「アセクシュアル」という言葉 [Helm 2015: 32] や、性的接触はなく親友や恋人とはまた異なるとても親密な関係を指す「ズッキーニ」という言葉 [Michelson 2015] などが生まれ、セクシュアリティは「性のあり方」全般を含むより広義な単語となってきたといえるだろう。

そして、2000年以前は語られてこなかった（語る場を与えられていなかった）性的指向やジェンダー・アイデンティティを持つ人々が、自ら「名付け」そして「名乗り」を行っている。そうした事例を追うと、セクシュアリティとジェンダーというアイデンティティの他に、「ロマンティック」という位相が誕生し名乗られていることが確認できた [マーデル 2017: 142]。性的マイノリティの中でもさらなる周縁化をされていたアイデンティティを持つ者たちが、ネットという語る場の発達により、ようやく認知され始めたのだと推

測できる。個人の様々なアイデンティティをめぐる複数の交差する抑圧と、それに対抗する当事者たちの「名乗り」と「名付け」の現象を認識し理解するには、インターセクショナリティの理論を取り入れ、現在「名乗り」と「名付け」が積極的に行われている「ロマンティック」という位相を意識することが必須であると考えられる。

II 調査の概要

新たな「名乗り」と「名付け」がどのようにして行われ、当事者にとってどのような意味をもたらすのかを確認することを目的に、新たな「名乗り」を実践する当事者を対象にインタビュー調査を行った。調査においては録音を行わず、インフォーマントから許可の取れた場合のみメモを取り、電子メールなど文面でのやり取りの場合は許可を得て引用している。このフィールドワークでは16人に会い、うち13人から調査の協力について同意を得た。本稿に記載されている情報はその13人に基づくものである。13人の出身地域は、関西地方10人、関東地方2人、日本以外が1人である。筆者と出会った時点での年齢は、10代1人、20代7人、30代3人、未確認2人であり、その内3人が学生である。既婚者は2人、未婚（非婚）者は10人、未確認は1人である。本稿で主に取り上げるのは、その中でとりわけ深く話を聞くことのできた5人である。5人の詳しい属性については事例ごとに後述する。

本稿の記述にあたり、登場する当事者の全員から同意と許可を得ている。しかし、今現在においても性的マイノリティをめぐる多くの偏見や差別、スティグマは残っている。そのため、本稿ではインフォーマントの特定に繋がる情報をできる限り伏せ、場合によっては年齢も開示しないという措置を取っている。インフォーマントには基本的にアルファベットのイニシャルを用いるが、これは筆者がデータをまとめる際に独自にナンバリングを行った上で割り当てた完全な仮名である。これにより記述の追証が困難になることが予想されるが、何よりもまず個人の特定を可能な限り防ぎ、本稿がアウトティング⁷⁾に加担してしまうような事態が起きないための、必須の措置を取った故

であることを明記しておきたい。

2017年から2020年までの約3年間にわたるこのインタビュー調査は、ネットを通して出会った数名を除くと、ほとんどが筆者の知人友人を介する紹介者（またはさらなる紹介者）から成り立っているものである。このような極めて狭い地理的・社会的な範囲における個々人のオーラル・ヒストリーから展開される本稿の分析と検討は、日本全体あるいは現代社会全体の性的マイノリティを包括的に捉えたものではないかもしれない。しかし、今まで日本においてほとんど体系的に記述・報告されていないものの確かに存在し、すでに共に社会を生活している性的マイノリティが、どのように自らのアイデンティティを「名乗り」または「名付け」ながら生活しているのかの実態を報告・分析する本稿は、セクシュアリティやジェンダーに関する議論のみならず、現代社会・文化の実態や形状を把握することの一端にも寄与できるものがあると考えられる。

Ⅲ 新たな「名乗り」—当事者の語り—

1 A氏の事例

A氏は、都内在住の20代、シスジェンダーの男性だ。A氏は長らく自身をヘテロセクシュアル（異性愛者）であると認識していたが、成人後に恋人ができた際に、性的欲求を感じないということを実感したそうである。今はアセクシュアルを自認するA氏に、その名称を名乗る理由を尋ねた。

「エッチなことがしたいと思ったことがないんですよ。ずっと。キスとかセックスとか体を触り合ったりとか、全然したくない。」

性的な接触や性行為への欲求がないと言うA氏は、自身は性的魅力を経験しないアセクシュアルであると繰り返す。

「僕は、恋愛っていうのかな、人を好きにはなるんだけど、そういうの（性的な接触）は求めてないです。」「（生理現象としての勃起を）処理するときもあります。ほとんどないですけど。それでも人と（性行為が）したいとは思わないです。」

アセクシュアルであることは性機能の不全とは関係がない、ということが A 氏の語りから分かる。アセクシュアルが受けがちな偏見が A 氏の語りから見えた。また、性的魅力を経験しないアセクシュアルであるということと、恋愛を経験するか否かということは異なる位相であることがうかがえる。

2 B 氏の事例

B 氏は、ジェンダーフルイドの 20 代である。B 氏の出生時に割り当てられた性別は女性であるが、性別違和を抱えており、自身のジェンダー・アイデンティティに長年「モヤモヤ (B 氏の言葉より)」を抱えていたという。2 年前、SNS (ソーシャル・ネットワーキング・サービス) の利用を通して読んだ記事で「X ジェンダー (男女二元論に当てはまらないジェンダー)」を知り、自身のジェンダー・アイデンティティに近いものを感じ、さらに用語を調べ、自身がジェンダーフルイドだと納得したと B 氏は語る。ジェンダーフルイド (流動的ジェンダー) とは、ジェンダー・アイデンティティが一定ではなく流動的に変化する人を意味する。

「(Twitter で見た記事を読んで) X ジェンダーをね、覚えました。変化の幅は小さいけど私はたぶんそこです、って (思った)。でも男女どちらでもないとは思わなくて、日によって気分によって男女をグラデーションみたいに行ったり来たりしていると思った。自分がそういう認識だということにそのとき気付いた。ジェンダーフルイド、それ！流動的なやつ！で、急にスッキリした。確かにあるこの違和感は、と思ってモヤモヤしていたので助かった。」

既存の言葉に当てはまらない感覚を抱えていた、自分を表す言葉と出会って安心した、自分だけではないと思えた、等の言葉から、「名乗り」がただカテゴリ分けをするためのものではないとうかがえた。

3 C 氏の事例

C 氏は、ジェンダーフルイドの 20 代である。C 氏は自身がバイセクシュアルなのか、ヘテロセクシュアルなのかで悩み、そして、そのどちらでもない

と感じたという。その頃、ネットで「ロマンティック」の概念を知り、自身の経験に納得が言ったと語った。

「幼き頃の諸々を振り返ると、やっぱり恋愛対象は男性で、性的欲求（の対象）は女性です。アンドロロマンティックのジノセクシュアルになるんよな。ちゃんとそういうのも名称あるんだねー。恋愛感情と性的欲求が結びつかないから、（自分は）おかしいんだと思った。自分を表す言葉があるって、わりと自己肯定感に直結するよね。」

「男の人と恋愛して付き合っても、その人とはどうしてもセックスしなくなかったし、できなかった。その人のことが好きじゃないんじゃないって、ただ自分がそう（男性に性的欲求を感じないから）って分かった。好きな相手なのに（性行為が）出来ない自分が自分でもわからなかったけど、今はやっとわかる。」

自らを表象する言葉の存在が自己肯定感と結びついていると語るC氏。語りの中で登場したアンドロロマンティックというのは、ロマンティック（恋愛指向）の一つの類型である。対象がないまたは恋愛的魅力を経験しない場合、アロマンティックとなる。対象が男性ならばアンドロロマンティック、対象が女性ならばジノロマンティック、同性ならばホモロマンティック、異性ならばヘテロロマンティック、対象が両性ならばバイロマンティック、対象が全性ならばパンロマンティックとなる。セクシュアリティの場合も同じく、たとえば性的指向が女性に向いているならばジノセクシュアルと言い表すことができる。

4 D氏の事例

D氏は、アンドロセクシュアル・バイフレイロマンティックのシスジェンダー男性、30代である。過去にある女性から好きだと伝えられ、意識し始めて交際に至るも、性行為を行わずセックスレスが原因で破局した経験がある。フレイロマンティックとは、ロマンティックの形態の一例である⁸⁾。

「流されやすいと言われたけど、これはもう自分でどうにかなるもんじゃないじゃないですか。彼女は好きだったし、ずっと一緒にいられると思ったの

は本当。でも向こうが求めているもの（性行為）をあげられないから、俺は男しか性的に見られなくて、それが噛み合わないのがしんどいなら関係は解消するしかない」

「セックスレスが原因で別れるのは、人によっては（性行為は恋愛において）凄く大切なことだし、仕方ない。無理にするのは違うし、できないし。向こうもそんなことは望んでいなかったから。」

「でも、なんで愛した女に欲情できないんだ俺は？ならバイじゃなくてゲイなんじゃないのか？って自問自答して、それで何個かサイトを見て、こういう分け方（セクシュアリティとロマンティックを分けること）があるって知ったんです。」

「もう、納得！って、彼女にも連絡して、俺これだったんだよ、愛していたのは嘘じゃないんだよ、って。お互いにとっていい終わり方ができた。」

セクシュアリティの対象は男性、ロマンティックの対象は両性、というD氏は、ロマンティックというアイデンティティに出会うまで、恋愛と性行為がイコールで結びついた価値観によって長い間悩まされてきたと述べる。自身のセクシュアリティとロマンティックを説明する言葉は、自己を肯定するとともに、他者からの理解を得る手助けにもなるという一例だろう。

5 E氏の事例

ある大学の性的マイノリティ・サークル関係者であるE氏は、サークルのメンバーが名乗るアイデンティティの変化を語る。

「この5年ほどでパンセクシュアルを自認するメンバーが増えたと感じる。以前は（当事者コミュニティのセクシュアリティは主に）ゲイやレズビアン、バイセクシュアルだけであった。また、Xジェンダーのように、性別違和を持つメンバーもトランス女性やトランス男性だけでなく“どちらでもない”自認のメンバーがいる。」

「セクシュアリティに関しては、アセクシュアルのメンバーが6人ほどいて、現在一番多い。」

E氏にはアクティビストや当事者の知り合いも多いが、こうした傾向は

20～30代の若い世代に多いという個人的感想を述べた。若年層に新たな「名乗り」がみられることも、ネット上のコミュニティやSNSを通してこうした言葉が広がっていることと無関係ではないだろう。

大学名とサークル名を伏せることを条件に、E氏はこのインタビュー内容を本稿に記述することに同意した。その理由は、サークルに参加する個人の特定を避けるためはもちろん、アセクシュアルに対する「まだ恋愛の良さを知らないだけ」や「性から逃げているだけ」のような偏見や、バイセクシュアル／パンセクシュアルに対する「本当のレズビアン／ゲイではない」や「同性愛は火遊びでどうせいつか異性愛に落ち着く」という偏見（バイ・パッシング）は根強く、他者から「本当のマイノリティか否か」の判定を行われることを避けるためである。

IV 考察

1 「名乗り」と「名付け」の作用

2000年代に入り、インターネットが急速に普及し始めると、他のあらゆるコミュニティと同じく、性的マイノリティもネット上の居場所を獲得する。サイトや掲示板が作られ、そこでチャットや悩み相談、議論、出会いなど、様々なことが行われ始めた。それにより、これまで当事者の集まる場所に参加したことのなかった層も含めて当事者同士の交流が可能になった。こうしてネット上で行われた当事者の語り、情報の共有、そして「性」にまつわる様々な議論は、ネットを発端として次第にそのコミュニティの共有知になり、それが社会運動や個人の振る舞いにまで影響を及ぼすようになっていく。ネット上での当事者たち（あるいは、ときとして非当事者を含む）のやり取りによって、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアルという「名付け」以外の性的指向を表す言葉がいくつも誕生した。また、性別違和のあり方にも様々なタイプがあると、ジェンダー・アイデンティティを指す言葉の数も増加した。そして、2010年代になるとSNSの利用が爆発的に流行し、それまでネット上とはいえ狭いコミュニティの中で使用されていた言葉が、ある投稿をきつ

かけにしてコミュニティ外の世界中に知れ渡るといことが起きようになる。SNSの利用によって、前述したコミュニティサイトや掲示板での性的マイノリティ当事者たちによる議論はさらに活発になり、それまで認識されていなかった性的指向とジェンダー・アイデンティティが主張され認識されるとともに、明確な意味を付与されて定義され、名付けられ、そして名乗られていった。その流れは本稿を書いている現在も変わっていない。

例としては、「パンセクシュアル」という言葉の拡散が挙げられる。2015年、ディズニー・チャンネル・スターのマイリー・サイラスが自身は「パンセクシュアル」とあるとカミングアウト [Sieczkowski 2015] し、パンセクシュアルという性的指向に注目が集まった。次いで2016年、ハリウッドのブロックバスター映画『デッドプール』の主人公キャラクターがパンセクシュアルという設定が明かされ、話題になった⁹⁾。パンセクシュアル（全性愛者／汎性愛者）とは、「あらゆるジェンダー・アイデンティティの人に惹かれる、あるいはジェンダーに関係なく魅力を感じる」性的指向であると、アメリカのLGBT+に関するメディア・モニタリングを行っているNGOのGLAADは定義している。パンセクシュアルという単語の初出は1914年、精神分析の専門用語として『Journal of Abnormal Psychology』に「Pan-sexualism」という表記で登場した¹⁰⁾。現在と同じ意味で、性的指向を指す自称語として性的マイノリティのコミュニティなどで使用する人が登場し始めたのは1970年代からだとされているが、コミュニティ内でも定着するようになったのは2000年代以降、ポップカルチャーなどでもパンセクシュアルという単語がみられるようになり、広く認識・使用されるようになったのは2010年代に入って以降であると言えるだろう¹¹⁾。

このように、「ヘテロセクシュアル（異性愛者）」と「ホモセクシュアル（同性愛者）」だけでなく様々な性的指向の存在が認識されるようになったことには、アメリカの性科学者アルフレッド・キンゼイ（1894-1956）が1940年代に提唱した「セクシュアリティは連続したものとして機能している」という考え方が背景にある。実際、こうした考え方が提唱されるより以前から、男女どちらとも交際や性行為を行う人たちや、相手のジェンダーに関係なく

惹かれる性的指向を持つ人々はコミュニティの内外に存在していた。そして、キンゼイの提唱がきっかけとなり、性的マイノリティの当事者たちの生活実践の中において、あるいは研究者たちのアカデミアの中において、ヘテロセクシュアルとホモセクシュアル以外の性的指向を指す「名乗り」と「名付け」が議論・創造され始めたのである。まず、比較的すぐ定着したのは「バイセクシュアル（両性愛者）」という、男女どちらにも性的魅力を感じる性的指向である。バイセクシュアルは「同性愛者になる過渡期」扱いや「異性愛者の気の迷い」扱いというバイ・バッシング（バイセクシュアルに対するバッシング）¹²⁾を受けつつも、一つの性的指向として存在を認められ、70年代から盛んになる性の解放運動ではLGBTという性的マイノリティの連帯に加わっている。これと連動して、性的指向だけでなくジェンダー・アイデンティティにおいても様々な「名乗り」と「名付け」がなされていくこととなり、前述したように2010年代に入りその動きはさらに加速している。

人気番組『クィア・アイ』¹³⁾に登場するグループ、ファブ・ファイブはゲイ五人組であることが“売り”の一つであった。しかし、2019年、メンバーのアントニはセクシュアリティの流動性を主張し、自身をゲイとは定義しない心境を語った [Kaplan 2019]。また、他のメンバーのジョナサンは自身のジェンダー・アイデンティティを男女二元論に当てはまらないとし、ノンバイナリー（男女のどちらか一方ではないジェンダー）であるとカミングアウトしている [Tirado 2019]。より適切な自身のあり方に沿った言葉を求め、それを「名乗る」、そしてその「名乗り」がコミュニティ外にも通用するようになっていくことが、これらのニュースから見て取れる。

日本においても、東京レインボープライド（TRP）の2019年4月28日に行われたパレードでは、「バイセクシュアルの交流会」というバイセクシュアルとパンセクシュアルのフロートが登場した。バイセクシュアルとパンセクシュアルにフォーカスしたフロートが登場するのはTRPにおいてこれが初めてのことである。こうした実践を通して、バイセクシュアルとパンセクシュアルが身近にいる存在であることを発信し、偏見の撤廃を目指すことが、このフロートが実行された目的であった。

様々なアイデンティティが主張され、認識され、名付けられ名乗られることは、自己理解を深めると同時に、他者理解を促す。「名乗り」と「名付け」を通して、自分はおかしい、何者なのかわからない、という苦しみから解放されたと語る当事者は多い [デッカー 2019: 217]。そうでなくても、マイノリティはアイデンティティ・クライシスに陥りやすい。「ステレオタイプの脅威」(Stereotype threat) という、心理学者クロード・スティーラーとジョシュア・アロンソンの研究からもそれは明らかだ。多くのマイノリティにとって、偏見あるステレオタイプが精神的な負担となる。また、その不安により本来の能力や自尊心が損なわれ、本人が恐れていた失敗を引き起こしたり、無意識的にステレオタイプをなぞってしまったりする。そして、さらに不安が強まり、余計に能力や自尊心を失っていく悪循環のことを指す [ヤン 2018]。社会におけるロールモデルやレプレゼンテーションの欠如により、自身のアイデンティティを肯定的に受け止められなかったり、自身のアイデンティティがわからなかったりすることで、既存のステレオタイプとのズレに苦しむ確率や、アイデンティティを理由に迫害を受ける確率は飛躍的に上がる¹⁴⁾。自身に合った、自分が反映されていると思える名称を、同じ感覚や違和を持つ者同士で議論しながら「名付け」、そしてそれを「名乗る」ことは、アイデンティティ獲得の実践なのである。

性的マイノリティ当事者たち、とくに若い世代を中心に、こうした新しい概念が浸透しはじめており、日本国内でも言葉が作られている¹⁵⁾ (X ジェンダー、ノンセクシュアルなど)。ジェンダー・セクシュアリティは「性のあり方」全般を含むより広義な分野となり、文化や社会にあるあらゆる差別や搾取の問題と密接に結びついている、という認識も深まってきている。アクティビズムの面でも、そうした認識と動きがみられる。新たな概念を受け入れる、あるいはそれを求めていた当事者層がいることは、筆者の観測範囲からも明らかである。

2 「ロマンティック」という概念の導入

2000年代の初め、SAM (Split Attraction Model) という魅力分割モデル

の提唱が、アセクシュアルの世界的なネット・コミュニティで行われた¹⁶⁾。これは、他者に対して感じる「魅力」を分割して理解する方法である。恋愛と性欲求の分割を指す。「恋愛の好き (Romantic Attraction)」と「性愛の好き (Sexual Attraction)」は必ずしも同時に経験するわけではなく、また、同時に経験される必要もない、という思考である。つまり、恋愛対象の性別の傾向と、性欲求の対象の性別の傾向は異なる場合があるということである。そうして、性的指向 (Sexual orientation) に加えて「恋愛的指向 (Romantic orientation)」という言葉が誕生した。これにより、セクシュアリティがセクシュアル (性的魅力を経験する) かアセクシュアル (性的魅力を経験しない) かということに加え、ロマンティック (恋愛的魅力を経験する) かアロマンティック (恋愛的魅力を経験しない) かという、より詳細なアイデンティティの「名乗り」が可能になった。

この流れはすべて、英語圏を中心とするネット上のアセクシュアルとアロマンティックのコミュニティが2000年代前半から議論を重ねることで起こった。しかし、非英語圏の当事者も相当数がこの議論に加わっていることは、アセクシュアルとアロマンティックのコミュニティが生み出した名称や用語が瞬く間に世界中で使用されていることから明らかだろう。2010年にはSAMがコミュニティ内で根付き、アロマンス (誰にも恋愛感情を抱かない、恋愛的な魅力を経験しない) というロマンティックのあり方の人々が存在証明および「名乗り」を行うようになっていく。2019年にはこの概念はコミュニティを越えてSNS上に広く流布し、セクシュアリティだけでなくロマンティックに関するカミングアウトが有名人やインフルエンサーによっても行われた。

恋愛的指向と性的指向がイコールではないとすることで、一方を神聖視したり俗物視したりすることや、愛情は性行為で示すものだというような価値観から自由になることができると考える。そして、そうした異性愛主義かつ愛情と性行為を結びつけるイデオロギーの恋愛伴侶規範 (Amatonormativity) に当てはまらず苦悩していた当事者は、ロマンティックという概念を知り、それに基づいて自らに合った「名乗り」を手に入れることで、自己の恋

愛と性のあり方を肯定できるのである。

新たな語が誕生し、「名乗り」と「名付け」が繰り返されることで議論が起き、その語が消えたり定着したりしているというのが現状である。そうした例としては、以下に二つの言葉を挙げる。

スコリオセクシュアル／スコリオロマンティック (Skoliosexual/Skolioromantic)……トランスジェンダーの人に恋愛感情や性的欲求を抱く。スコリオの語源がギリシャ語の「折れ曲がった」であることや、トランスジェンダーを本人のジェンダー・アイデンティティに沿ったジェンダーで扱わずミスジェンダリングする可能性が大きいこと、トランスジェンダーを特殊なモノ扱いしていることから、侮蔑的とされすぐに廃れて現在ほぼ使用されなくなった。

サピオセクシュアル／サピオロマンティック (Sapiosexual/Sapioromantic)……相手の知性に恋愛感情や性的欲求を抱く。これはフェティシズムの範囲であり、セクシュアル・オリエンテーションとロマンティックは基本的にジェンダー概念なのでこれを持ち込むべきではない、といった議論が起きている [Respers 2019]。

前述したジノとアンドロという用語も、性器の名称が語源であるため、ジェンダーと性器を結びつけることへの批判は既にある。ジノ (gino) ではなくウマ (uma)、アンドロ (andro) ではなくマ (ma) を使用する人も多い。結果として、検索においても混乱が生じることになっている。

こうした「名付け」と「名乗り」はこの10年ほどで運動として戦略的にまともになってきたが、細分化が進めばアイデンティティ・ポリティクスが行いづらくなり性的マイノリティの差別解消が行えなくなるのでは、と危惧する当事者も存在している¹⁷⁾。しかし、マイノリティのアイデンティティをめぐる差別解消を目指すために、さらに認知の低いアイデンティティを持つ者を大きな枠に同化する、あるいはマジョリティに埋没させることを良しとすることこそ、アイデンティティ・ポリティクスと差別解消に反することであると筆者は考える。「LGBTが「好ましいダイバーシティ要員」として社会に包摂されはじめたこの時期、クィアは単に包摂を押し進めればそれで良しとす

るのではなく、むしろ、その包摂がどのような排除を正当化しているのか、それを執拗に問う側面を残していた」[清水 2018] という指摘があるように、好ましくない多様性の担い手とされた人々は、権利擁護の主張から取りこぼされ、時に積極的に排除や攻撃の対象となってきた。「LGBT 主流化」の中で、LGBT のアイデンティティ・ポリティクスから取り残された性的マイノリティが、可視性の機会を求めて「存在の公言」を行い始めた実践が、インターネット時代のこうした新たな「名乗り」であると考えられる。クィア理論と政治の局面においては、80～90 年代のアイデンティティ・ポリティクスにおいて、「存在してはならない／公言してはならないことになっているセクシュアリティの存在の公言」が重要な政治課題の一つであった [清水 2018]。日本においても、SOGI (Sexual Orientation Gender Identity) に関する新たな概念が認識・使用され、アイデンティティのあり方が多様化・細分化したことによって、より自分に合った名称を「名乗る」ことができる人が増えてきたのではないだろうか。

おわりに

本稿では、2000 年代以降盛んになったインターネット時代における性的マイノリティの「名乗り」と「名付け」について事例を交えて紹介し、その社会的・文化的意味と意義についてジェンダー・セクシュアリティ研究の動向を鑑みながら予備的に考察することを目的とした。

第 I 章では、まず、ジェンダー・セクシュアリティ研究の近年の動向を概観し、特にインターセクショナリティの概念が注目されていることについて確認した。第 II 章では、調査の概要を説明し、続く第 III 章では、当事者がインターネットで出会った情報をきっかけにして新たな「名乗り」を始めている事例を紹介した。第 IV 章では、性的マイノリティの「名乗り」と「名付け」がアイデンティティ獲得の実践かつ解放運動であること、インターネットを通して今後も活発な「名乗り」と「名付け」の運動が起きていくだろうということを、当事者運動の歴史と「ロマンティック」という概念の誕生から明

らかにした。

性的マイノリティの中に、従来の「名付け」に疎外感や違和感を持ちネット上で新たな「名乗り」を始めた者たちがおり、コミュニティが作られて以降、その「名乗り」を行う者たちの数は徐々に増えてきた。そして、その疎外感や違和感を新たな「名乗り」や「名付け」を通して克服した事例が、インタビュー調査から確認された。その理由を分析すると、「名乗り」と「名付け」を通して自己理解や他者理解は進められることがわかった。また、ジェンダーやセクシュアリティの位相では表現できない、ある位相でのアイデンティティのあり方が存在することが判明し、その位相が「ロマンティック」であると分析できた。要するに、本稿の当面の結論は、今後のジェンダー・セクシュアリティ研究、性的マイノリティ研究はインターセクショナルリティの理念を取り込み、「ロマンティック」という位相を導入することが必要不可欠、ということである。

性的マイノリティ当事者たち（特に若い世代）を中心に、本稿で前述したように新しい「名乗り」と「名付け」が浸透し始めており、日本国内でも言葉が作られている（Xジェンダー、ノンセクシュアルなど）。ジェンダー・セクシュアリティは「性のあり方」全般を含むより広義な分野となり、文化や社会にあるあらゆる差別や搾取の問題と密接に結びついている、という認識も深まってきており、アクティビズムの面でも、そうした認識と動きがみられている。新たな概念を受け入れる、あるいはそれを求めていた当事者たちが、ネット社会の発展により、自ら「名乗り」と「名付け」を行うことができる環境が整えられたことで、その存在を表明する力を発揮しているということが、性的マイノリティをめぐる近年の動向といえるだろう。

注

- 1) インド=ヨーロッパ語族では、女性名詞や男性名詞、中性名詞など、ジェンダー化された言語が多い。
- 2) 当時の偏見と差別が反映された性科学は、奴隷政策や民族浄化政策、女性の政治参加除外、そして同性愛者の「治療」という、差別による加害行為の正当化に用いられた。セックス・ジェンダー・セクシュアリティをめぐる歴史は、人種問題とも結び付いているのだ。

- 3) 性分化疾患 (DSDs: Disorders of Sex Development) とは定型的なあり方とは一部異なった身体的な特徴、体の性の様々な発達。インターセックスという表現もある (この表現を嫌がる当事者や当事者家族もいる)。DSDs 当事者の多くは自分を LGBT など性的マイノリティの一員とは考えていないが、DSDs を持つ人たちの中にも LGBTs はいる [砂川 2003]。
- 4) ジョン・マナーによる「双子の症例」。1960 年代のカナダにおいて、外科医の失敗でペニスを失った一卵性双生児の片方の男児を、「女の子」として育てる実験。一卵性双生児の男児二名が、男の子として育てられた方は男の子に、ペニスを欠損し女の子として育てられた方は女の子に育ったとし、育て方でジェンダー・アイデンティティは変えられるとした。しかし、女の子として育てられた男児は成長して自身のジェンダー・アイデンティティは男性であると発言し、マナーの論証は偽りであることが発覚した。ジェンダー・アイデンティティは生まれつきなのか、そうではないのか、という論争に巻き込まれたこの双子は、後に二人とも自殺してしまった。
- 5) 性的指向は、恋愛感情や性的欲望の対象の性別を指すものとして誕生した。現在の私たちの社会では、そして基本的に人間社会はどこでも、社会全体として、生物が人を区分する最も重要な軸として (それをよとするかどうかは全く別問題として) 機能しているからである。「指向性別」と表現した方が、意味が明確になるのではないかという議論もある。
- 6) LGBT とは、レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダーの頭字語。ジェンダー・アイデンティティが女性で性的指向が女性に向く人がレズビアン (女性同性愛者)、ジェンダー・アイデンティティが男性で性的指向が男性に向く人がゲイ (男性同性愛者)、ジェンダー・アイデンティティが何であれ性的指向が男女両方に向く人がバイセクシュアル (両性愛者)。出生時に割り当てられた性別とジェンダー・アイデンティティが一致しない、ジェンダー・アイデンティティが揺れ動く、など性別違和を持つ人をトランスジェンダー (性別越境者) という。
- 7) 性的マイノリティの本人の了承を得ずに、公にしているセクシュアル・オリエンテーションやジェンダー・アイデンティティなどを暴露すること。
- 8) ロマンティックには、ホモロマンティックやヘテロロマンティックという恋愛対象のジェンダーを表す言葉に加え、恋愛形態を表す言葉も存在している。よく知った相手に恋愛感情を抱かなくなることをフレイロマンティック、親密な相手にも恋愛感情を抱くことをデミロマンティック、相手に恋愛感情を抱くが相手からも恋愛感情を返されることは望まないことをリスロマンティックやアコイロマンティックなどと表す。セクシュアリティの場合も同じく、例えば、よく知った親密な相手にもみ性的欲求を抱くことをデミセクシュアルと表すことができる。
- 9) しかし、作中では軽口のようにパンセクシャルであることを匂わせるのみ。
- 10) しかし、この「Pan-sexualism」は性的指向の意味ではなく、あらゆるものが性的なものに帰着するというフロイトの理論の延長で作り出された単語である。
- 11) パンセクシュアルは長年存在していたが、メディアの表象をあまり得ていなかったため、性

的マイノリティのコミュニティでも誰もがパンセクシュアルというアイデンティティを知っているわけではない。という記事を GLAAD は 2015 年時点で公式サイトに掲載している。
(<https://www.glaad.org/blog/what-pansexuality-4pan-secelebs-explain-their-own-words>,
2020 年 11 月 20 日閲覧)

- 12) バイ・パッシングとは、バイフォビアが原因で行われるバイへの非難。バイセクシュアルを男女誰とでも性関係をもつ、ふしだら、浮気者とみなす等。同性愛者からのバイパッシングもある。バイを同性愛者の偽物扱いや不純物扱いする、どうせ最終的には異性を選ぶ裏切り者扱いする、本命の異性が現れるまでのお遊びと決めつける、同性愛者だと自覚するまでの過程なのでセクシュアリティの一つとは呼べないとするなど [田中 2003]。
バイセクシュアルの人はゲイやレズビアンコミュニティやネットワークに入っていることも多いが、その中でも自分がバイセクシュアルであると言いづらいつい言う人もおり、カミングアウトが必ずしも同性愛者向けのものだけではなくたりもする [砂川 2018]。
- 13) 有料動画配信サービス Netflix のオリジナル製作のリアリティ番組であり、様々な分野のプロフェッショナルである 5 人のゲイ男性「Fub5」が、自分に自信を持ってない悩みを抱えるゲストを魅力的に改造するというもの。2018 年の放送以来、Netflix の看板番組であり、番組とメンバーどちらも高い人気がある。
- 14) 2017 年、イギリスの下院議会において俳優かつ活動家であるリズ・アーメッド (Riz Ahmed 1982-) がスピーチを行い、マイノリティのレプレゼンテーション (表象) の重要性を訴えた。このスピーチは、マイノリティの表象が少ないということが、マイノリティの精神的負担や自己肯定感の欠如を生み出すだけでなく、マイノリティへの差別やヘイトクライム (憎悪犯罪) の再生産にも繋がる、という指摘であった [Ahmed 2017]。
- 15) 性的欲求を抱かない、または性行為を必要としないという人の性的指向をアセクシュアルというが、日本においては「ノンセクシュアル」という呼び方をする人もいる。また、男女二元論に当てはまらないジェンダー・アイデンティティをノンバイナリーやジェンダークィアというが、日本では「X ジェンダー」という呼び方が一定の支持を得ている。
- 16) アセクシュアルの最大のコミュニティ・サイト「AVAN」において、2005 年までにロマンティック (恋愛指向) という単語が定着したとされている。ネット黎明期のため詳しい情報は不確かであり、古参のサイト参加者からの語り継ぎによって定説が成り立っている。ロマンティックの考え方自体はそれ以前にもネット上で何度か観測できたようだが、定着と議論の発展はこのサイトを中心に起きたと言える。SAM の概念が定着した 2010 年前後では、それまでアセクシュアル・コミュニティにいたアロマンティックたちが独立し、アロマンティックのコミュニティ・サイトが設立されるに至る。
- 17) また、性的マイノリティのコミュニティにおいても、アイデンティティの揺らぎを持つ人やこうした新しい名称を使用している人 (既存の名称に当てはまらない人) を下位存在だと認

識している人が存在する。

参考文献

Ahmed, Riz

2017, *Diversity Speech 2017 @ House of Commons*. Channel4

E、ヤン

2018 「ステレオタイプ脅威」『別冊日経サイエンス No. 228』日経サイエンス社

Helm, Katherine M

2015, *Hooking Up: The Psychology of Sex and Dating*, ABC-CLIO. Kantor, Jodi and Twohey, Megan

June, Karli and Milks, Megan

2014, *Asexualities: Feminist and Queer Perspective*. Routledge

Kapran, Ilana

2019, 21 October, *How Queer Eye Transformed Antoni Porowski*. GQ Magazine. <https://www.gq-magazine.co.uk/lifestyle/article/antoni-porowski-cookbook?amp>

Michelson, Noah

2015, Oct 16, *What's A Skoliosexual?*, Huffington Post. https://www.huffingtonpost.com/entry/skoliosexual-zucchini-and-10-other-sexual-identity-terms-you-probably-dont-know_us_561bf841e4b0082030a35f80 (2018年11月16日閲覧)

Respers, Lisa

2019, 27 September, *Mark Ronson isn't sapiosexual after all and apologizes for identifying as such*. CNN. <https://amp.cnn.com/cnn/2019/09/27/entertainment/mark-ronson-not-sapiosexual/index.html>

Stryker, Susan

2017, *Transgender History, second edition: The Roots of Today's Revolution (English Edition)*. Seal Press.

Tirado, Fran

2019, 10 June, *Queer Eye's Jonathan Van Ness: "I'm Nonbinary"*. OUT Magazine

荒木生

2018 「フェミニズムの新たな潮流—「第4波フェミニズム」」『常民文化』第42号(成城大学常民文化研究会): 43-52

石田仁

2019 『はじめて学ぶLGBT』ナツメ社

加藤秀一

2017 『はじめてのジェンダー論』 有斐閣

河口和也

2003 『クイア・スタディーズ（思考のフロンティア）』 岩波書店

風間孝、河口和也

2010 『同性愛と異性愛』 岩波新書

柏木治

2011 「植民地における結婚と同棲」『ヨーロッパ・ジェンダー文化論—女神信仰・社会風俗・結婚観の軌跡』 明石書店

古川誠

1993 「同性愛者の社会史」『わかりたいあなたのための社会学・入門——常識破壊ゲームとしての社会学・全20講座』 宝島社

砂川秀樹

2018 『カミングアウト』 朝日新聞出版

実川元子

2020年8月15日 「フェミニズムに（も）「インターセクショナル」な視点が必要な理由。【VOGUEと学ぶフェミニズム Vol. 5】」『VOGUE JAPAN』 <https://www.vogue.co.jp/change/article/feminism-lesson-vol5> (2020/10/15 閲覧)

清水晶子

2018 「《エスニック・フェア》のダイバーシティ —可視化の政治を巡って」『女性学 2018 vol. 26』

田中玲

2003 『トランスジェンダー・フェミニズム』 インパクト出版会

デッカー、ジュリー・ソンドラ 上野勢子訳

2019 『見えない性的指向 アセクシュアルのすべて —誰にも性的魅力を感じない私たちについて』 明石書店

ナショナルジオグラフィック協会

2017 『National Geographic 日本版 2017年1月号 ジェンダー革命』 日経ナショナルジオグラフィック社

バトラー、ジュディス 竹村和子訳

2019 『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』（第二版） 青土社

浜本隆志、伊藤誠宏、柏木治、森貴史、溝井裕一

2011 『ヨーロッパ・ジェンダー文化論—女神信仰・社会風俗・結婚観の軌跡』 明石書店

ブレイク、エリザベス 久保田裕之監訳

2019 『最小の結婚——結婚をめぐる法と道徳』 白澤社

マーデル、アシュリー

2017 『13歳から知っておきたいLGBT+』ダイヤモンド社

前川直哉

2017 『＜男性同性愛者＞の社会史——アイデンティティの受容／クローゼットへの解放』作品
社

森山至貴

2017 『LGBTを読み解く——クィア・スタディーズ入門』筑摩書房

渡辺和子

1997 『アメリカ研究とジェンダー』世界思想社

